

特49-730



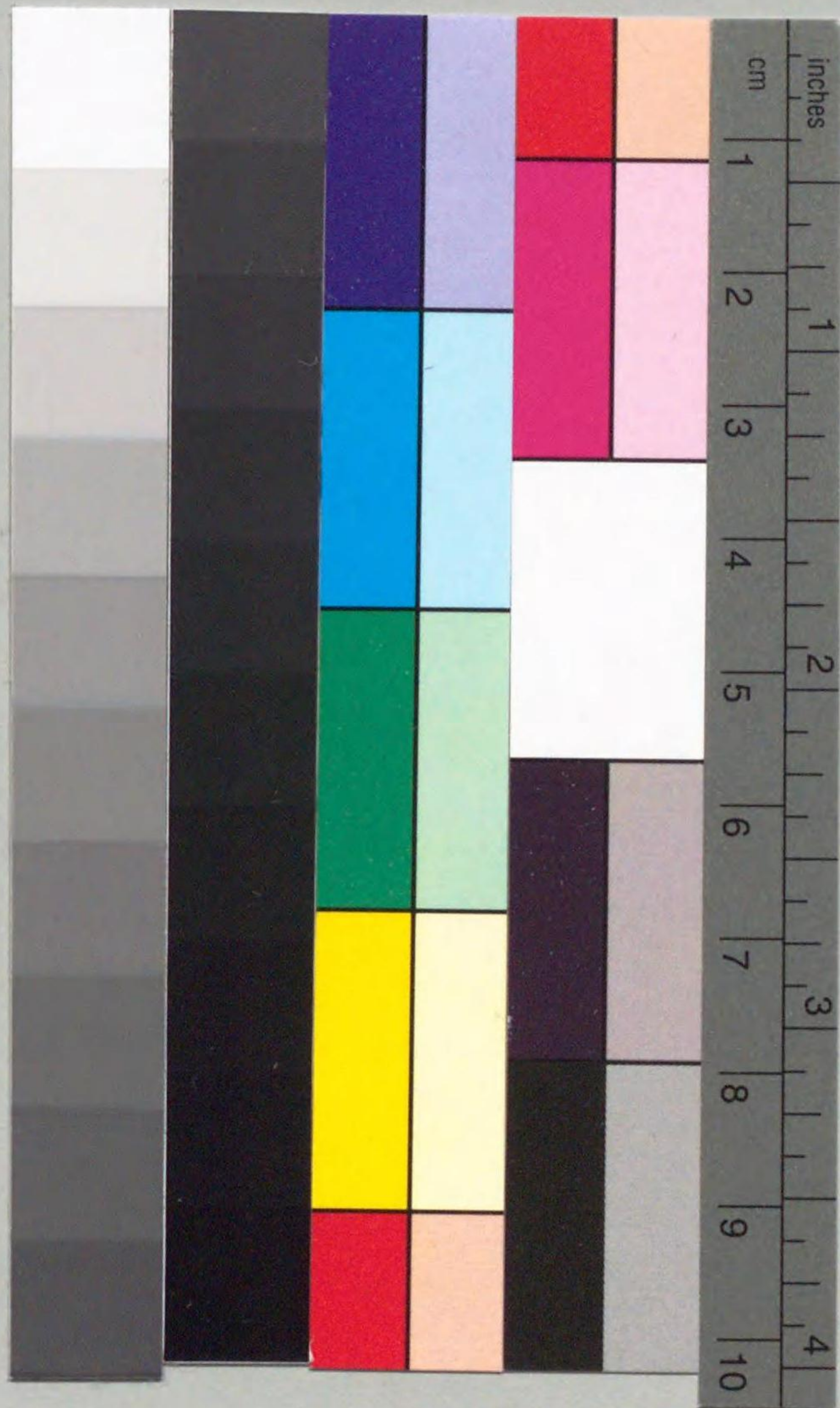
1200500900728

教育幻灯映画説明書

国立国会図書館

特

7





A-5

教育幻燈映面說明書
全

日本少年立志傳

258
895

本日 少年立志傳幻燈映畫目錄

- 一 台徳公十三歳ふして怒牛ふ驚かぬ圖
- 二 毛利元就十三歳にして大志ありし圖
- 三 吉兵衛忍耐して忠勤を全うする圖
- 四 松平信綱赤心を以て幼主よ仕ふる圖
- 五 黒田長政幼ふして父子の大義を知る圖
- 六 農夫龜松父の危難を救ふ圖
- 七 徳川頼宣年少くして豪氣ふ富む圖
- 八 大石良金吉良家義周よ向ふ圖
- 九 將軍家治九歳よして下民を憐れむ圖
- 十 荒木又右衛門十三歳よして山賊を感せしむ圖
- 十一 紀國屋文左衛門海中よ木偶を投ずる圖
- 十二 水戸黄門七歳ふして暗夜よ生首を持來る圖
- 十三 西郷隆盛十三歳よして惡少年を懲す圖
- 十四 小奴廉直よして身を立つる圖



(第一) 台徳公十三歳よして怒牛ふ驚かぬ圖

台徳とは徳川二代將軍秀忠公の諡なり公は家康公の第三子にして天正七年遠州濱松
み生まる天性英明剛毅よして敢て物よ驚かざるの度量あり十三歳の時近侍と與よ書
を講ずる事ありしに偶々門外を通る牛いかよしけん大ひよ怒ッて牛飼を突倒し直ち
み邸の正門を入りて御書院に暴れ込み戸を蹴放ち障子を踏破りしかば滿座の人々あ
れよくと驚き騒ぎ机よ躓くもあり見臺を踏毀すも有りしが獨り公は泰然として書
を讀まれその得意の處よ至れば膝を打ッて感歎し給ふ狀少しも平日と異なる事なし
既にして一章を終ふるや悠然として起ち滿座をシツと睨み給ひしかばいかなるお叱
りを蒙るべきかと人々息を殺して平伏し居たりしふ別ふ何事も宣はざりき是れも同
ト頃み有りし事とて武家閑談と云ふ書よ記されたりある時公諸侯群臣と俱み猿樂を
觀て深く御意よ適ひし体なりしが俄あして地大ひみ震ひ戸障子は外れ屋根瓦は落ち
庭の剪裁はユラ／＼と風無くして戦ぎ立ち其有様いと物凄くぞ見えたりける然るお

公にはさりげ無き体よて御座を起ち給はざりしかば尾張大納言は見兼て御側よ走寄
り今おもこの屋根落ちやもすべし速よお庭み出で給へと云へば公は從容として壁す
らまだ壞れざるみなどか屋根の落つる事あるべきとて遂み大納言の言み從はざりき
とぞ

(第二) 毛利元就十二歳ふして大志ありし圖

毛利氏姓は大江其先は參議音人み出づ其孫維時朝綱降つて匡衡匡房等皆學術文章を
以て盛名あり元就儒家の遠裔を以て雄材大略に富み陶晴賢を誅し尼子氏を亡し大友
氏と戦ひ威望赫奕たりしが山陰山陽の諸侯皆好を通ぜざるは無かりき元就漸く十二
歳なりし時家臣を從へて嚴嶋の神祠に參詣せし事ありき禮拜畢ツて問うて曰く汝等
何を祈るや一人進んで曰く若君の安藝の主たらん事を祈るのみ元就悦ばずして曰く
汝等何ぞ余が天下の主たらん事を願はざるや夫れ天下み主たらん事を願ふものは能
く一方よ主たるを得一方に主たらん事を祈るものは能く一國に主たるを得今僅に一

國に主たらん事を願ふその成就する所知るべきなりと聽く者皆舌を捲く諺ふ曰く蛇は寸にして牛を呑むの氣象ありと元就の如きを謂ふか

(第二) 吉兵衛忍耐して忠勤を全うする圖

江戸本郷五丁目伊勢屋吉兵衛といふ者あり初の名を吉松といふ十一歳の時他の二人の友達と共に生國近江より江戸に下り本郷一等の糶屋伊勢屋彦四郎方草靴を脱ぎたりその時他の二人は尋常お足を洗ひて主人の前に出でしに吉松は已が草鞋を洗ひて垣根を乾し而る後二人の後に踞りぬ主人は此体を見て心竊かにその注意の深きを賞せり主家お二十人の若者あり毎日糶を擔つて得意先を廻り日暮お歸り來りて又一臼の米を搗き之を二斗入の半切に移すを常とすある日吉松裏庭にイみつゝ頻りに落涙の体なりければ主人其由を詰りしに答へて曰く御家に米盗人多し私昨夜半切の米に指もて大の字を書きて置きしに今朝に至り文字の跡形だふなし是れ米を盗去りたる者あるが故なりと主人乃ち吉松を米奉行と爲し搗米の監督を任せしに其後米盜

人の憂皆無となれりと

年稍長するに及び他の若者と共に得意先を廻らしめしに朝は四時よ起き先づ一荷を擔ひて遠く芝邊に往き一旦店に歸りて又一荷を擔ひて神田邊に向ふ是を以てその利益常に他人に倍せり斯くて彼は此家お十八歳の春を迎へぬある日主人は吉松に命じてお茶の水より飲水を汲み來らしむ往復十七八町彼は肩に一荷の水を擔ひ額お珠なす汗を流しつゝ勝手の敷居を跨ぎ吻と一息する間も無く主人又一荷をと命ず斯くする事三回未だ朝飯を喫せざりしかば飢餓と疲勞とよ眼眩み足痿れて幾んど昏到せんとせり

主人は莞爾として彼を出迎へ先づ奥の一室に請じ紬の小袖を着せて上座に居えやがて二人前の料理を取寄せ主人と相對して箸を執らしむ食事終りて若者一同を次の室お呼寄せ諭して曰く今日より吉松を吉兵衛と改名し糶方の番頭を申付く汝等心に不平あらば速お暇を取るべし又吉兵衛は若者一同を監督し意に満たざる者あらば容赦

なく暇を遣すべしと吉松は謹んで主命を奉じ二十年一日の如く忠勤を盡したりしが如何なる仔細やありけん暇を取りて主家を出でたりその時主人は永年の功勞に酬ゆる爲として僅かよ金三兩を贈與せしよ彼は毫も不平の色なく懇おその厚恩を謝せり後その友吉兵衛お對ひ何故よ斯ばかりの少金を受けしやと詰りしに主人の思召に對し勿体なくも異存を申すべきよ非すと答へしとぞ嗚呼吉兵衛の如きは眞に商人の鑑と謂ひつべきなり後一家を成して繁榮に赴くと云ふ

(第四) 松平信綱赤心を以て幼主よ仕ふる圖

將軍秀忠の時松平信綱世子竹千代に仕ふ時よ年僅かに十二竹千代父の居室の屋根に雀の巢くひたるを見て其雛を獲んと欲すれども父の怒に觸れんことを恐れ信綱に命じて夜に乗じて屋根に上らしむ信綱諫むれども聽かず是に於て深夜將軍の寢鎮まりし頃を窺ひ竊かに起出で、屋根に攀上り拔足差足して將に雀の巢よ近寄らんとする時誤つて片足を滑らしてコロコロと瓦の上を轉げてズデンドドウと庭の隅お墜ち

たり

將軍は此物音に目を覺し夫人に手燭を執らせ追ッ取り刀おて庭に出でけるに小さき男の兒の地の上に平伏したるあり其面を視れば即ち信綱なり何故よ屋根に上りしかと問へば小雀を獲んが爲と答へぬ誰の命を受けしかと問へば已の意に出でたりと答へぬ將軍之を怪み再び詰問すれども其實を告げず乃ち信綱を布袋に盛りて高く鴨居よ吊して曰く實を告げずば何時までも食物を與へずと翌日夫人將軍の不在を窺ひ信綱を布袋より出して密かに食物を給し又舊の如く之を鴨居に懸く偶將軍歸來り詰問すること頗る嚴酷なれども信綱遂に前言を改めず夫人傍より辞を盡して罪を謝しければ將軍は能く後來を誡めてこの少なき罪人をば放ちける其後姿の全く隠るゝを待ち莞爾として夫人を顧みて曰く三つ兒の魂は百までと云ふ諺あり彼年少と雖も竹千代の罪を一身に引受け敢て其實を吐かず眞に末頼もしき奴かなと信綱後老中と爲りて幕政よ參し智惠伊豆の名海内よ噪し將軍秀忠も亦人を觀るの明ありと謂ひつべし

(第五) 黒田長政幼にして父子の大義を知る圖

賤ヶ岳の戦に黒田孝高一砦を守る援兵未だ至らず心に必死を期す乃ち家臣栗山利安を呼びて之を謂つて曰く我子吉兵衛齡僅かお十歳も過ぎずこの戦場を落延びたりとも我家の名折ともなるまじ汝彼を護して國に歸り余をして後嗣を絶たしむる勿れと利安憚ばず他人をして之に代らしめんと請ふ孝高諭して曰く後嗣を完うする事豈も容易の業ならんや能く其任を盡さんか其功戦死に優る事百倍なりと利安乃ち吉兵衛を欺きて馬に上せ轡を執つて行くこと一里許り吉兵衛怪んで故を問ふ利安已むを得ず語るに其實を以てす吉兵衛聲を勵して曰く汝が言違へり父上常も余に訓へて曰く武士は敵に背を見せず孝子は父の難に赴くと惟ふ是れ汝が一存の計ひならんと利安歎つて曰く若君の言甚だ好し流石は大殿の御子なりと馬を返して砦に還る既にして秀吉の大軍到り我軍大勝を獲たり吉兵衛後ふ甲斐守長政と稱す

(第六) 農夫龜松父の危難を救ふ圖

信濃上野の國境に破風山といふ高山あり其麓に惣右衛門と呼べる農夫あり其家を三丁程隔て、逢月といふ處あり猪鹿の害を防がんが爲に番小屋を設けたり頃しも天明八年九月惣右衛門は其子龜松と共に此小屋に赴きぬ龜松は外に出で、草を刈り惣右衛門は内に在りて火を焚き湯を沸かし有りしに一匹の狼突然と躍出で、惣右衛門の足に食付き驚きて振放さんとする彼が唇より頤に掛けて又食付きしかば彼は狼の耳を攫み乍ら頻りに助を呼びしに龜松は直ちに駈け來り持ちたる鎌を其口に打込みしに脆くも折れたりければ更に父の鎌を取りて柄の方より其口に捻込み猶も小石を以て力の限り打込みしかば漸くにして父を放したれども父は痛手も弱りて身動きも自由ならず龜松益々怒りて狼を組付き搦指を以てその兩眼を抉り出せしかば流石の猛獸も力竭きて其場に斃れぬ幸ひ父の傷は急所も非ざりしかば龜松は其手を執りて我家に連れ歸り早速醫師を招きて治療を加へしお日を逐ひて快方お向ひたり龜松時に年僅かに十一遠近の人々傳聞きて皆舌を捲きたり書よ曰く戦陣も勇ならざるは孝

に非ずと龜松の如きは孝勇兩ながら全き者と謂ひつべし

(第七) 徳川頼宣年少くして豪氣に富むの圖

頼宣は家康の子幼名を頼將と云ふ十四歳の時大阪の役起りしかば父に従ひて軍中に在り五月七日先陣に戦始りたりと聞き馬を鞭ち衆を先ちて現場に馳付けしに最早戦終りたる後なりき頼將之を残念と思ひ父の本陣に到り泣いて曰く父上兒を先陣に加ふることを許し給はざりしかば兒をして時機を失ひ晴れの軍に逢ばしめず誠に口惜しき次第なりと返すく怨言を述べければ側に在りし松平正綱之を慰めて云へるやう若君は尙だお齡も幼くましませば此後斯かる戦争に幾度も出會ひ給ふべし左まで無念に思召し給ふなど云へば頼將聲を勵まして正綱何と申を頼將か十四歳の時は再び有るべきやと云ひけるを家康聞きてさて雄々しき頼將が一言かな今日の軍に魁して何程の功名を立つるともよも此上には過ぎまじと嘆賞せり當時の名將水野勝成細川忠興等も亦坐に在りけるが何れも頼將の豪氣の拔群に勝れたるを嘆美して虎の子

地に落つれば牛を食ふと云ふ諺あり眞も斯かる例にこそ引く可からん此君後年必ず雄名を天下に轟かし給ふなるべしと云ひけるが果して其言の如く英主の譽高し後紀伊國を領し大納言となり子孫代々幕府御三家の一としてその權威將軍に亞けりとぞ

(第八) 大石良金吉良家義周に向ふ圖

大石良金は主税と稱す大石良雄の嫡子なり成童にして身の丈五尺七寸性剛毅にして材藝に長ず淺野家滅亡の後父と共に京都に上り山科に居る元祿十四年十二月十四日の曉良雄等四十七士復讐の擧あり出發の際に至るまで良金父の側に假寐し鼾聲雷の如し人皆其沈勇に驚く既にして良金一隊を率ゐて吉良家の後門より攻入る當の敵義英の嫡子義周薙刀を揮つて來り闘ふ良金その義周なるを知らず身を挺んじて渡合ひ暫時は火花を散らせしが義周は額と肩とよ手傷を負ひ這々の体にて逃失したり一同高輪泉岳寺に引上ぐるや良金戯に寺僧に謂つて曰く君等常に演劇の斬合を觀たらん未だ眞劍の勝負を視ざるべし若し上杉の同勢追到らば君等をして我輩の爲す所を見

物せしめん其愉快なる演劇に優ること萬々ならんと刀を揮つて跳躍するの氣勢近くべからず時に人あり上杉の同勢來逼ると報ず良金笑つて曰く彼等果して白刃を交ふるの勇氣あらば宜しく我黨の歸路を扼すべきに今白晝に及んで來襲ふ是れ既に時機を失す必ず此事なからんと果して其言の如くなりき幕府細川松平毛利水野の諸侯をして良雄等を分拘せしむ良雄は細川氏に屬し良金は松平氏に屬す父子相訣かるゝに臨み良雄容を正して良金に謂つて曰く汝一旦緩急の場合に臨むも父が平素の教を忘るゝ勿れと良金笑つて曰く兒不肖と雖も豈に婦女子の所爲を學ぶものあらんや明年二月幕府良雄等に切腹を命ず良金時に年十七從容として死に就く斯父にして斯子あり眞に千古の美談と謂ひつべし

(第九) 將軍家治九歳にして下民を憐れむの圖

家治公幼名は竹千代家重公の長男にして有名なる吉宗公の孫なり江戸城西丸に養はる九歳の春近侍と共に紙鳶を放つある日天俄かに曇り雲の行くこと飛ぶが如しやが

て疾風砂煙を捲きて起りしかばモウ是れまでなりと近侍とも力を合せて糸を手繰りしがピンと張詰めて手繰らんとすれを却つて引摺られければ一同必死となりて立働きけるに糸は途中よりフツと断れて紙鳶は何處とも無く飛去りたり家治アツと叫びて紙鳶の行く方を暫時眺めて居たり其狀いかにも紙鳶を失ひしを悲む如く脇目からは見ぬしかを老臣の某と云ふ者進出で有章院様(家繼公)の御時よは斯かる風荒き日を選びて紙鳶を放ち故と糸を断りてその飛行く狀を御覽じてお樂とは遊ばしきされば一春よ新調する紙鳶の數もなか／＼少からざりしよ僅か一ツ失はせ給ふとも何程の事か候べき更に新しき佳き品を進め奉るべければ御機嫌を直させ給へと賢らだちて諫めけり家治公は頭を左右に振りて否とよ余は紙鳶を失ひたるを悲むは非ず飛びたる紙鳶は何の地へか落つるならん其他の者將軍家の紋所を見れば必ず余が紙鳶なる事を知りて之を返上するとて多くの人手を煩はすならん余が假初の戯の爲に大切なる國民の家業を妨げんが悲しく覺ゆるなりと云はれければお年よも似合すと某を

初め左右に侍りし人々孰れも目を側て舌を卷きて聰明に渡らせらるゝ事よと感合ひけり家治公二十四歳よして將軍の職を襲ぎ五十歳にして薨ぜられしがその在職の間老中田沼意次むねつぐありて權威を弄び萬民を虐げ歴史上に汚點を留めしは返すくも歎かはしき次第なり

(第十) 荒木又右衛門十三歳にして山賊を感ぜしむる圖

劍法の達人としては宮本六三四伊藤一刀齋と其名を齊うし仇討の名譽は曾我兄弟赤穂義士と其高きを競ふものは荒木又右衛門吉村なり吉村は伊賀國荒木村より出で劍法を柳生十兵衛及び宮本六三四より受け後諸流を參酌して別に一流を成せしと云ふ吉村幼名を岩之助と云ふ十三歳の時同じ年頃の朋友と共にはごを持ちて小鳥を求めつゝありしが或る日興に乗つて山又山の奥よ分入り日の暮るゝをも知らで彼方の谷陰へ走り此方の森下にイみなどして有りけるが夕日の西山に傾けるに驚きて始めて家路を辿りぬきて路程は彼是れ三里も有るべきよ途中よ某の時ありて時折山賊出で

通行人の金錢物品を掠むる事あれば風評はいよゝ高くなり行きて今は往來よ人の影も絶ゆる許なりきされは又右衛門いかの峠を避けて他の路を取らんと言出でけるよ連なる少年は冷笑ひてそは憶病者のする事なり左様なる所を通りて面白き話の種を得べけれとてズン／＼と先立ちければ又右衛門も強いては其意に逆はず其後よ從へやがてかの峠よ差掛りしに果して山賊らしき者只ある崖の下よ大の字よ横はりて雷の如き轟の音凄じく四邊の木立に響きたりかの少年は少しも怯るゝ氣色無く此處は天下の往來なり其路側に小便すればとて何人よりも咎を受くべき筈無しとて故と崖の下に向けて尿せしかば其飛沫の顔に掛かりしと見え彼賊大ひよ驚き跳上り何者なれば我に對して不禮を働くぞと初は飛掛りもせん氣勢なりしが相手が小兒なりしかば俄かに笑顔を作り聲音を和げお身達よくも斯かる淋しき山路を越らるゝよな取別け夜に入りては人通りも絶わて無きよ岐路小路も多ければ案内無くては行惱むべしイザ村近くまで案内して參らすべしと兩人の後を尾け來るを木下闇に透し視れば

雲突く許りの大男なり弱身せなばいかなる憂目をや見るならんわが度胸を示して彼奴の肝玉を挫いで呉れんとかの少年は殊勝も山姥の謠曲を聲高らかに謠出でたり其聲峯の松風に通ひ麓の谷川も傳はりていと雄々しく聞ゆしが段々と聲に慄出で調子亂れて果てはバツタリと止みてけりその時賊カラ／＼と打笑ひ御身の元氣は眞の元氣には非ずして附元氣と云ふものなり最前から一言も云はぬ伴の若衆こそは眞の大丈夫の魂を持ちたるなれ末頼もしき生立かなと深く歎美して去りぬこの男は後に由井正雪が謀叛に加はり四天王として其名を天下に知られたる加藤市郎右衛門にてありき

(第十二) 紀國屋文左衛門海中に木偶を投ず圖

文左衛門は紀伊の國加田浦の人年々熊野の浦に大なる鰐魚現はれ往々漁船を襲ふ漁師ども之を怖れ業を休む者多し文左衛門一策を案じ木偶の大きな人の程なるを造り中に填たす毒藥を以てし之を漁船に乗せて沖合に到り故らば舷を叩いて歌を謠ふ鰐

魚之を聞きて忽ち船頭に現はれ大口を張つて來り逼る文左乃ち木偶を投ぐれば鰐魚噛碎いて之を吞下す忽ち血を吐き海水紅を流す時は風起り波立ち船幾んど覆らんとするもの數回なりしが文左少しも騒がず既にして鰐魚その便々たる腹を上よして波間へ漂ふ漁師ども捕へて海濱に揚げ刀を把つて其腹を割く中に革財布あり黄金千兩を藏ひ文左事の始末を國守に訴ふ國守その奇計を以て民害を除きたるを嘉みし獲る所の金を賜ふ文左敢て私せず其金を頒つて四方の窮民を賑はす是れ於て文左の門前晝夜人の黒山を築き口を極めてその高德を稱す村の父老も亦相謀り推して邑長と爲り文左時年十八後國産の檳柑を船に積込み熊野灘遠州灘の風浪を冒して江戸に到り忽ち五萬圓の利を獲たり其國に歸るや鮭魚十萬尾を買ひ來り之を京大阪に賣り又大利を獲たりされども文左は志小成よ安んずる者よあらず竟に江戸に出で八町堀に住みたりしか本郷丸山の火災起るや晝夜兼行して信州の本曾に到り他の材木商に先だつて悉く材木を買占めたりしかば又非常の利益を獲是より人呼んで紀文大盡と云

へり晩年家道頗る衰へ始あつて終なきの譏を免れざりしとは云へ兎にも角にも商業界の英傑と謂ひつべし文左性風雅を好み俳諧を其角に學び號を千山と云ふ佳句極めて多し

(第十二) 水戸黄門七歳よして暗夜に生首を持來る圖

水戸黄門の文武兩道に優れその行跡の奇抜にして往々人を驚かすもの有りしは今も講談師輩の口よ上る所なり卿は名を光圀と云ひ權中納言頼房の第三子にして家康公の孫寛永五年六月常陸の水戸に生まる父頼房卿既に三十歳に及ぶと雖も世子未だ定まらざりしかばある日將軍家光公より速かよ定めよと御下命ありしかば御守役中山信吉を遣はしその選定方を任せたり若君達は各自その選み入らんとして衣服を飾り言語舉動を慎む状の見えけるが獨り光圀卿のみはお年も尙だ六歳の傷け盛りとは云へ少しも取繕ふ状は無く三寶の上よ熨斗鮑を取つて爺やイザ之を取らせんと無造作に言はるゝ所お自ら人の上よ立つべき態度のホノ見多しかば此君こそと抱上げてや

がて江戸小石川の邸に迎取りけり

その翌くる年の秋の頃にもや有りけん邸内の櫻の馬場よ於て罪人を打首にしたる事ありきその夜雨降り風吹荒びて屋の外は鼻を摘まるも知らぬ程の闇夜なりしが父君は光圀卿の膽方を試さんものと思召よや將た一時の戯れよや汝晝間見しあの曝し首を此處に持來るを得るやいかにと云はれければいと易き事にて候と小太刀を手挟み袴の股立ち取りて甲斐くしく出で往きたり燈火とて無ければ小石に躓き草葉の露よソボ濡れつゝ辛うじて仕置場お入れば千筋お枝垂るゝ柳の枝は妖怪の黒髪の如く見え遠方の森に鳴く梟の聲は變化の私語く如く聞ゆ其淋しさ何と譬へんに言葉も無かりき世の常の童ならば膽潰れて其場に倒るべかりしお流石は一世の名君と後世に名を傳へらるゝ丈ありて小供心おにもピクともせず行成りかの首臺に攀登りて冷き死首の髻を引攪みエイヤくくと右に推し左に引きしかば止めの釘離れて首はドツと地上に轉び落ちぬ追掛けて拾上ぐればその重さは四五貫目も有れば却々細き腕には

引下ぐべき様も無かりきイザさらばと落散りし荒繩の端よかの髻を結付けズテ濡となりて其首を父君の前に持來りしかば好うこそ仕つたれイデ褒美を取らせんとあつて卿に御秘藏の短刀を賜はりぬ

(第十三) 西郷隆盛十三歳にして悪少年を懲らす圖

明治維新の三傑と云はゞ人先づ指を西郷南州公屈す上野公園の銅像を見ても其人物の非凡なるを想像するに足る隆盛通稱は吉之助鹿兒島加治町に生れ七歳にして聖堂に入り尋いで加治屋町方限に入りて文武兩道を修む方限とは兵兒謠に謂ふ所の健兒の社なり天保十年九月十四日の夜隆盛一隊の少年を率ゐて藩祖義弘公の廟に參詣せり是れ例年の習にて土地にては之を武者參りと云ふ少年皆甲冑を着くるを以てなり隆盛時に年十三途中並木の松原公差掛かりしに他の方限の一隊と落合ひぬ彼方の少年は孰れも十六七歳の年輩にして其隊長は餓鬼大將として界限に幅を利かす横堀三助なりされバ西郷の隊の者の年幼く數少きを侮り後よりドツと喚き叫んで前に摺抜

けんとし其一人を突倒しぬ此体を見て幼き武者ども嚇と怒り刀の鞘に手を掛け已に大事に及ばんとせしに隆盛は暫らくと押止め悠然として三助の前より至り君等は僕等の長者なり僕等に若し過失あらば教訓を賜はるべき身分なるにこの狼籍は何事ぞ仔細有らん承りたしと意氣凜然として詰り掛けたり氣早の三助皆まで聽かず小癩なる言分かな理窟は面になりイザ腕付くで相手せんと拳を固めて無法ふも打つて掛ければソレ後れを取るなど双方入混つて撲合ひしが三助は脆くも隆盛の膝下より組伏せられ頭部を散々打据ゆる辛と跳起きて隆盛を組伏せんとすれば其身はドツと一問許り彼方より投付けられたりこは適はじと頭を抱ゐて逃げ出せば部下の者も總崩に崩れ何處へか姿を隠しぬ斯くして其夜は一同無事に參詣を終へて歸りしが三助は深く之を恨み日夜隆盛の出入に目を注げたりある夜隆盛は一人聖堂より歸り來り淋しき裏道に差掛りしに樹陰より躍出で、物をも言はず斬掛けたる曲者ありヒラリり身を轉してその利腕を攫み熟く其面を視ればかの三助なり卑怯者めと大喝一聲引擔い

で傍の小川にドリ塵打拂ッて我家に歸れば肩の邊より血汐滴りつゝありさては身を轉さんとする時掠られしか何程の事かあるべきと其儘父母にも告げずして臥床に入りしが翌朝に至り痛み激しく堪へ難し醫師を招きて治療を加へ數十日を経て漸く癒ゆぬその後明治十年九月城山に一片の煙と消ゆるや首なき骸の岩崎谷の邊に横はれるあり官軍その肩の刀痕を見て始めて隆盛なるを知りしと云ふ

(第十四) 小奴廉直よして身を立つるの圖

伊勢の國山田の町に一人の浮世を忍ぶ隠士ありけり或る時所用ありて黄金二枚を友人某より借受け日の暮るゝ頃家へ歸りて懷中を檢めし其金なしさては途中よて遺しゝならん人通り多き往來の事なり後へ戻りて隈なく搜したりとて再び我手に入るべしとも思はれず止みなん止みなんとて其儘寢よ就きしよ十一時頃お至りホトホトと戸を叩く者あり出でゝ見れば年頃十四五の商家の丁稚らしき少年なり曰く何某と申すは此方なりや然らば先刻金子を落されずやと問ふ然りされど如何よして余が姓

名を知りしやと問返せば包紙の端よ書乱したる中に落し主の姓名と思はるゝ文字ありたれば近所の人々に其住所を問糺したれど惟と知れる者なしされど此町よ住める人なるべしと思ひて彼方此方を尋廻り漸く前の横町のある店にて確とお住居を聞込みたり夜も更けたればよもや起きてはお坐すまじ明朝早く參上すべきかとも思ひたれど否々寸時も速くお報らせ申さばお寢覺の心も安かるべしと思返したれば推して罷出でたるなりと云ふ隠士大ひに喜び御身は土地の人とも見ゆず何方よ奉公し給ふや改めてお禮を致したければ報らせ給へと云へばいやとよ奴はお禮を受けんとてお金を返せしよ非ずそのお心遣必ず御無用と言棄てゝ逃ぐるが如く馳去りたり

さても奥床しき少年かなイザ行先を見届けて置くべきかと隠士は取る物も取敢ぬず見ゆ隠れに其後を尾けて行く事敷丁只ある酒屋の店に入るを見て我家に引返したり翌日酒肴を整へて彼家を訪ひ主人に面會を求めて一伍一什を物語り若子の金子を取出して曰く之をか少年に贈るもよも受取るまじされば其許預り置きて好き機會を

258
895

見て贈與し給はれと云ふ主人大ひよ喜びて曰く拙者もかの少年を信用せぬとよは非
ねど斯くまで正直なるべしとば思寄らざりき我家の寶物を知らず他人より教へらる
事の面目なるとして早速かの少年を呼びて手代頭見習を命じたりきとぞ

日本少年立志傳終

明治四十一年十月廿八日印刷
同 年同月卅一日發行

定價金六錢

著作
所有

編輯兼
發行者

池田

兼吉

東京市淺草區
御藏前片町

印刷者

東京府平民
加藤

喜三郎

東京市淺草區
森田町拾番地

印刷所

加藤

活版所

東京市淺草區
森田町拾番地

發賣元

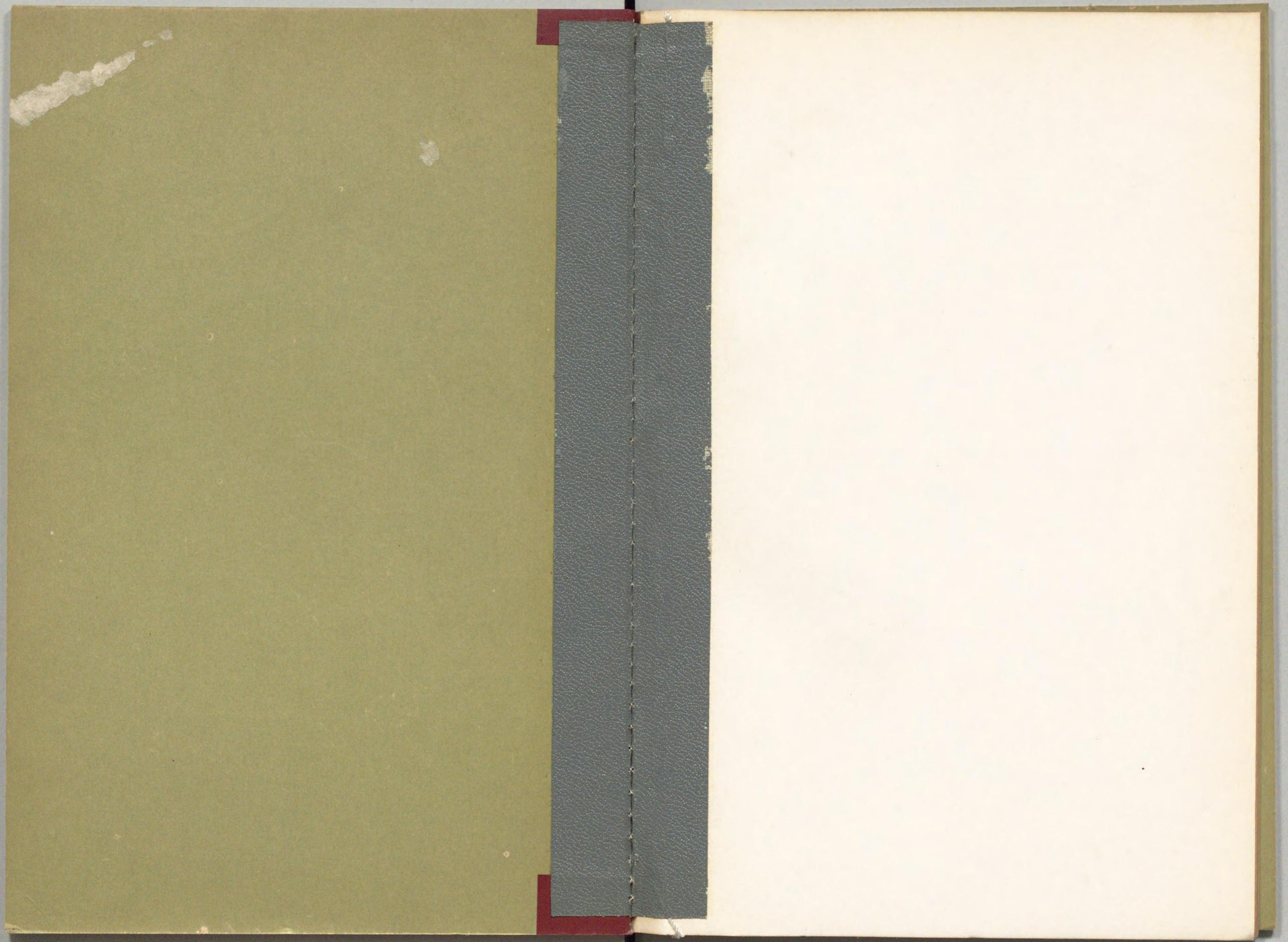
東京市淺草區
御藏前片町
池田

都樂

電話下谷五百九十番
長距離接續加入
振替口座一五三三六番



A-5



0